

それに縁起の悪い迷惑な事をおつしやいます。それで此宿屋は私の生活のためにやつて居ることは御承知でせう。何の爲にそんな事をおつしやるのか、不都合千萬です。」それからお客も怒り出して、もつこズツと大きな聲で云つた。そして二人は非常に怒つて別れた。

しかしお客が行つたあとで、主人はごうも變だと思つて、蒲團を檢へにあいた部屋へ上つた。そして其處に居る間に彼は聲を聞いた。そして彼に客の云つたことは全くの事實であることが分つた。叫んだのは一枚―たつた一枚―の蒲團であつた。あごは静かであつた。彼はそのふこんを自分の部屋へ運んだ。そしてそれからあごの夜中それをきてねた。そして其聲は夜あけまでつづいた。「兄さん寒からう。」「お前寒からう。」それで彼は眠ることが出

來なかつた。

然し夜が明けると彼は起きて、蒲團を求めた古手屋の主人にあひに行つた。古手屋は何にも知らなかつた。彼はもつこ小さい店から其ふこんを買つたのであつた。そして其店の主人は町のズツと郊外に住んで居る一層貧しい家からそれを買つたのであつた。そして宿屋の主人は尋ねながら、次から次へに行つた。

それから最後に其ふさんは、貧しい家族のものであつたここ、それから町の近傍にその家族が住んで居た小さい家の家主から買つたことが分つた。そして其ふさんの話はいかがであつた。

其小さい家の屋賃は一月僅か六十錢であつたが、それでも貧しい人達にとつて拂ふには大金であつた。父は一